# 登録記念物への登録

《登録記念物（名勝地関係）の新登録》　４件

## １　藤川谷（ふじかわだに）【徳島県 三好市（みよしし）】

藤川谷は、徳島県西端の愛媛県と高知県の県境近く、旧上名村（きゅうかみみょうむら）と旧西宇村（きゅうにしゅうむら）の山間地域に位置する渓流で、周辺の山々に源を発する多くの支流を集めて東に流れ、大歩危小歩危（おおぼけこぼけ）を成して北流する吉野川（よしのがわ）に注ぐ渓流を成している。支流を含め全長約１２ｋｍに及ぶこの渓流には、下流域から上流域にわたって、三段淵（さんだんぶち）、手斧淵（ちょうなぶち）、柴橋跡（しばばしあと）、長淵（ながぶち）、赤子淵（あかごぶち）、ヨケン淵、けいす淵、ヒョウタン淵、くわん淵、タケノ瀬、ナゼラ、カンバ淵、宮淵（みやぶち）、じんべ淵、雑水川（ぞうずがわ）、どろめきの滝、アイナ淵、岩屋首（いわやくび）、石釜（いしがま）（男淵（おぶち）、女淵（めぶち））、チョウナ淵、くも取り淵というように、神秘性を帯びて名付けられた数々の深淵などが連なっている。藤川谷が所在する山間部には、危険な土地と結び付けられた妖怪などにまつわる伝承があって、なかでもこの藤川谷の深淵などには数多くのそうした言い伝えが定着しており、自然に対する畏敬の念のほか、特に深淵を忌避してその危険を普及する生活の知恵が反映されてきたものと考えられている。近年、そうした伝承は、地域の魅力を再発見する取組の中で見直されるようになり、継承活動にも活発に取り組まれている点でも意義深い。今回、そうした藤川谷のうちでも、けいす淵の一部を含む津屋谷（つやだに）が合流する付近を下流端とし、ヒョウタン淵、くわん淵、タケノ瀬、ナゼラ、カンバ淵を含む約２ｋｍの範囲を登録するものである。

## ２　夕日岩屋（ゆうひいわや）【大分県 豊後高田市（ぶんごたかだし）】

夕日岩屋は、国東（くにさき）半島南西部の田染（たしぶ）に所在し、田染小崎（たしぶおさき）と田染真中（たしぶまなか）の境に岩峰群（がんぽうぐん）を成す間戸ン岩（まどんいわ）の景勝とその中腹に西を向く岩屋などから成る名勝地である。田染は、宇佐神宮（うさじんぐう）の本御荘（ほんみしょう）十八箇所のひとつとして平安時代後期に成立した「田染荘（たしぶのしょう）」の故地として知られる。古く夕日岩屋は、その岩峰背面東側にある朝日岩屋（あさひいわや）とともに、馬城山（まきさん）（現在の真木大堂（まきおおどう））の末寺（まつじ）として建武（けんむ）４年（１３３７）の「六郷山本中末寺次第（ろくごうさんもとなかすえでらし）幷（だいならびに）四至等注文案（しいしとうちゅうもんあん）」（『永弘（ながひろ）文書』）にも記される行場の一つであった。杵築（きつき）南画（なんが）の祖と称される十市石谷（といちせきこく）（1793-1853）は山水画の画題として、田染小崎から東に臨む間戸ン岩の間を昇り来る月の風情に田染八景の一つ「間戸山月」を見出し、後の識者らもその景勝に重ねて漢詩を読み継いだ。狭小な岩陰から成る夕日岩屋には、平安時代の作と見られる木彫仏残欠や江戸時代以来の石仏が祀られている。その近傍には、岩間の細い割れ目をくぐり抜けることで生まれ変わるとされる「針の耳」が所在するほか、西側からの登拝道の途中には北西方に遠望する西叡山（さいえいざん）を遥拝する「拝み岩」の露頭や風籠り（大風除け）の石祠などもあり、古代から続いてきた信仰の営みを伝えている。

さらに、近年では、田染荘に育まれてきた農村景観の保全が注目される中で、特徴ある展望地点としても広く普及している点でも意義深い。

## ３　朝日岩屋【大分県 豊後高田市】

朝日岩屋は、国東半島南西部の田染に所在し、田染真中と田染小崎の境に岩峰群を成す間戸ン岩の中腹に東を向く岩屋などから成る名勝地である。田染は、宇佐神宮の本御荘十八箇所のひとつとして平安時代後期に成立した「田染荘」の故地として知られる。古く朝日岩屋は、その岩峰背面西側にある夕日岩屋とともに、馬城山（現在の真木大堂）の末寺として建武４年（１３３７）の「六郷山本中末寺次第并四至等注文案」（『永弘文書』）にも記される行場の一つであった。間戸の朝日岩とも称されてきた岩峰に広く抉られた朝日岩屋には、東麓の間戸地区に産出する田染石を用いて、現存するものはおそらく近代に築かれたであろう石造覆屋などがあり、石造覆屋に安置されている激しく摩耗した木彫仏は、江戸時代の初めに火災に見舞われた西叡山の高山寺から焼けながらにして飛んできた焼仏であるとも伝えられている。間戸ン岩の東麓には二宮八幡社や間戸寺跡、穴井戸観音など、特に江戸時代以降、水にまつわる観音信仰が民間に深く定着してきたことを窺わせる霊地がいくつか所在し、火砕流堆積物が分厚く台地状に堆積して河川も無く、水の確保に苦心してきた事情を窺わせる。間戸地区からの比高差２０ｍほどのところに仰ぎ見て祀られた朝日岩屋は、長くそうした地域の願いを集め続けた名所として意義深い。

## ４　落門の滝【大分県 竹田市】

落門の滝は、大分県南西部の竹田市街地の断崖に懸かる人工の瀑布である。その成り立ちは、岡藩主の中川久清（1615-1681）が、備前国岡山藩から熊沢蕃山（1619-1691）を招請して、その指導の下に寛文元年（１６６１）から同２年にかけて農業水利施設として開削した城原井路によるもので、稲葉川支流の久住川に取水し、その末流のひとつとして「滝の上」から落差約４０ｍの崖下に広がっていた「下木」の水田に用水して、稲葉川に合流したものである。この瀑布は、会々の滝、雲井の滝、下木の滝、布引の滝、不動の滝など、さまざまに呼ばれて来たが、今日、広く「落門の滝」の名称が定着しており、その名は、広瀬淡窓（1782-1856）が、若い頃に初めて竹田に滞在したことを懐旧して詠んだ漢詩にある「斷崖泉落大夫門」（断崖の泉、落つる大夫の門）に由来すると言われている。崖下の水田は、大正１３年（１９２４）１０月に犬飼線（現・豊肥本線）の延伸に伴う豊後竹田駅の開業以降、鉄道用地、道路、宅地となって今は無

いが、竹田出身の南画家・佐久間竹浦（さくまちくほ）（1876-1925）が同年８月に描いた『落門の滝四季真景図』（六曲一隻の屏風絵）は、岡城城下町の風致景観の要を成してきた「落門の滝」の卓越した存在感を伝えている。今では武家屋敷風に改修された竹田駅舎の背後に切り立った崖地に懸かる瀑布の姿にかつての風光明媚を伝える。